

六花

RIKWA

6

俳句雑誌りつか

2016 (平成28年)
cover design Yuna Mizuno

ふみの日や文を書きたくなる切手
夜蟬舌打ち香を手向けてもどりけり
いまごろになつて込みあげ母の盆
山田家の妻は守宮を怖がらず
守宮一等兵ほふく前進弾もなし
はりつける守宮よお前も裸
掌にひいやりと乗るやもりかな
こほろぎを呑みそこねたる守宮かな
犬かきを知つてをりたる守宮かな
蚊くすべの昔や瀬戸の除虫菊
ひぐらしや句碑に誰が来し香の灰
迎火やこの香にして魂も来る
燃え尽きし物の白かり霊送り
大梨をいただきましたほとけさま

一人にはほどよき池よ蓮実とぶ

印南・平池13句

蓮は実を飛ばしてこころ静かなる
八橋に干涸びぬたる秋蛙
炎帝の柳を下りてきたる息
萍の渦まで遠く近づくよ
四阿を出て行く影や三尺寝
水を吹く風もとんぼの尾も青し
日輪は力強めて百日紅
盆明けや鮒釣男笠ひとつ
空を切る手網の父子の晩夏かな
葛の蔓自縛の花を咲かせけり
蓮の実の池を引きゆく水の音

対岸の闇の息づく蛭かな
蛭火の息を継ぎたるしじまかな
蛭狩道のかたへに獣よけ
さざ波の芥を寄する代田かな
青鷺の厨子のごとくに羽ひろぐ
樹間より見ゆる楼門風涼し
あぢさゐや庭師な権の禰宜なりし
釣人のひとり卯の花明りかな
うすら日の空に重なり花あふち
けぶらへる雨の海峡かたつむり

鍬の音涼しく土を寄せにけり

升田ヤス子

磯遊びしやがめば礁無限かる

鍬の音涼しく土を寄せにけり

麦秋のレンガの壁の茶房かな

巢燕に真一文字の嘴ありぬ

内側の汗かいてゐる苗障子

くわのおとすずしくつちをよせにけり ますだやすこ

土を寄せる平鍬の金属音。それが涼しく感じられるほどに暑い、という農業の詩。たしかにシヤリン、シヤリンと音を立て、土を浅く削り寄せるので、春耕のように深く鍬を打ち込んで返すのとは違う。「涼し」というのは夏の暑さゆえに感じる涼しさという季語。土寄せの鍬音さえ涼しいと感じたのは、砂漠のオアシスのような幻影かも。音の涼しさを言って対極にある炎暑を訴えているのである。「心澄めば暑もまた涼し」。「磯遊び」とどちらにするか迷った。

淡路島一望にして風薫る

永田万年青

青梅雨や茶房の奥の硝子窓

梅雨に入る杖も心も湿りゐて

淡路島一望にして風薫る

緑陰の中へ消えたる二人かな

盃の形の噴水弾ける輪

あわじしまいちぼうにしてかぜかおる　ながたおもと

「一望にして」と言葉格調高く詠んだ。「して」は単なる接続のようにも見えるが、しての後に「かもなおかつ」が隠れて接続し、淡路島の、全景が見えてしかもなおかつ、風薫るすがすがしい光景、であると、感銘しているのである。淡路を焦点に置いて、東西には大阪、鳴門徳島が青葉に包まれてわずかに霞む。こういう大きな句は一幅の画に等しい。すがすがしい写生句が万年青の持ち味。

雪卿集

花菖蒲

志方 章子

南天の花の溶け入る曇り空
あぢさゐや夜来の雨に濡るる袖
花菖蒲めぐる八橋真新し
噴水のもくもく上がりぬたりけり
浜豌豆踏み行く心貧しき日

七変化

出口

誠

七変化集ひ集ひて丸くなる
つる草の二階に届く夏の庭
ひまはりの見上げる先の曇り空
両側の草を倒して夏の川
岸からも鳥の舞ひたつ夏の朝

雪卿集

苗障子

升田ヤス子

鍬の音涼しく土を寄せにけり
麦秋のレンガの壁の茶房かな
巢燕に真一文字の嘴ありぬ
内側の汗かいてゐる苗障子
磯遊びしやがめば礁無限なる

梅雨

永田万年青

青梅雨や茶房の奥の硝子窓
梅雨に入る杖も心も湿りゐて
淡路島一望にして風薫る
緑陰の中へ消えたる二人かな
盃の形の噴水弾ける輪

雪卿集

太宰忌

佐津のぼる

二三片風より遅れ竹落葉
青芦に舳突込み繋ぎあり
親燕巢にもどりてはすぐ発てる
太宰忌や警戒水位に迫る嵩
いただきに雲降りて来し登山口

登山靴

松本文一郎

下駄箱の買ふ算段や走り梅雨
梅雨晴間映画館街素通りす
夏富士の水場に鳥の来るを待つ
縦走は昔語りや登山靴
着流しの金魚を携げて帰り来ぬ

雪樹集

栗の花

藤生不二男

午後の日のふたたび戻る栗の花
水口の音の高まる代田かな
麦秋や縁に湯呑の置かれあり
山霧のかたまりゆける時鳥
山の端に空の残れる蛭かな

河鹿

住田千代子

空の透く竹の若葉のさやぎかな
水音に和して河鹿の声美しき
銀竜草涼しき色に澄みぬたる
通るたび紫陽花に身を躲しけり
法要に新茶の封を切りにけり

蛍雪譚

六甲選

※調子は効果的に破れ、

二十八年九月号鑑賞

やまとうたは、人のこころをたねとして、よろづのことはとなれりける。世の中にある人ことわざしげきものなれば心におもふことを見るものきくものにつけていひだせるなり。花になくうぐひす、水にすむかはづのこゑをきけば、いきとしいけるものいづれかうたをよまざりける。ちからもいれずして、あめつちをうごかし、めに見えぬおに神をも、あはれとおもはせ、をとこをむなのなかをもやはらげ、たけきものふの心をもなぐさむるはうたなり。（『古今和歌集』仮名序）

「うた」というところを「句」に替えて読めば、現代にも十分通じる核心ではないかと思う。これを何度も口ずさんでみるのも為になるのではないかと。「ちからもいれずして」以下も何度も言い聞かせて句を推敲すると同時に句の判定をするときの定規にも。

青梅雨や茶房の奥の硝子窓

永田万年青

この句詩情溢れる青梅雨の喫茶店を題材にして詠んだ。喫茶店の奥の窓に緑がいや増して感じられる新涼の梅雨が見えて、鬱陶しい雨さえ清々しく感じられる。「茶房」と呼ぶことよって昭和の初期にたちまち遡る。おそらく万年青は以前句会をしていた古民家風の喫茶店「陶楽庵」のことを呼んだのだと思うが、ガロの「学生街の喫茶店」のに出てくる茶房でもない。



二三片風より遅れ竹落葉

佐津のぼる

風が過ぎたのち、一呼吸おいて二三枚竹の葉が落ちた。風が吹くと同時になく一呼吸おいて落ちたことを詠んだのがいい。竹の葉はひらひらと言っても細かくピラピラ回転しながら散るから美しい。落ち葉は通常秋であるが竹や麦などは夏に黄熟し、「竹の秋、麦の秋」などという。竹も稲科の植物だから、真竹は120年を周期に、ほぼ世界で一斉に開花し米のような実を付けて枯れる。孟宗竹はやく80年を周期とし、日本では会津磐梯山の歌にあるように、笹に黄金とはこのことを指していると思われ、80年に一度の大飢饉のとき竹の米を食べて飢えをしのげたという。笹はお酒との説も。